

## ルーン石碑と対話する

### イエリングの二つの石碑

小澤 実

デンマークのユラン半島中部、人口五万人程度の地方都市ヴァイレからすこし西に向かうとイエリングという小邑に到着する。このデンマークらしい開放的な町の教会敷地内には、デンマークの歴史を語る上で欠かせない大小二つの石碑がたつている(図1)。この二つの石碑に加え、異教時代の南北二つの墳墓、そして基層部が十世紀にさかのぼる教会を合わせた複合遺跡は、イエリング・モニユメントとよばれている。のちに述べその歴史的重要性のため、いまでは世界遺産としても登録されている。

十世紀に建立されたイエリングの二つの石碑には、文字列が刻まれている。しかしその文字は、当時のヨーロッパで広く使われ、私たちにもなじみ深いラテン・アルファベットではない。縦線と斜線を組み合わせたアルファベット(最初の六文字をあわせてフサルクとよぶ)からなるルーン文字である。この文字体系は、ローマ帝政期の紀元二世紀頃、ゲルマン世界で生まれ

た。当初二十四文字から構成され、ゲルマン世界で広く利用されていたが、八世紀までに十六文字に減少し、しだいにスカンディナヴィア世界でのみ通用する文字となった。

通常、イエリング石碑のように、ルーン文字の刻まれた石碑をルーン石碑とよぶ。ルーン石碑は、死者の記念を目的とする死者記念碑である。ほほどの石碑にも「X(＝建立者)がY(＝死者)を記念して、この石碑をたてた」という定型文が採用されている点が特徴的である。現在までにスカンディナヴィア世界全体でおよそ三千基が伝来しているが、そのほとんどはスカンディナヴィア人がヨーロッパ世界に拡大する紀元一〇〇〇年前後という時代に建立された。ヴァイキングが拡大した時代は、ルーン石碑が大流行した時代でもあったのである。

このような大量の石碑群のなかにあって、大小二つのイエリング石碑は、特別な位置を占めている。というのも、いずれもデンマーク王がその建立を命じたからである。小イエリング石碑は、ゴーム老王(九五八年死去)がその妻チュエラを記念して建立させた。ゴームは現在確認される最初のデンマークの王朝、つまりイエリング王朝の開祖である。直方体の石碑の表と裏に次のように刻まれている。

王ゴームは、デンマークの誉れであるその妻チュエラを記念してこの碑をたてた。

他方で大イエリング石碑は、ゴームの子ハーラル青齒王（九八七年死去）が、両親を記念して建立させた。三角錐の石碑は、その一面にルーン文字列が刻まれ、もう一面に獣の図像が、最後の一面にキリストの図像が描かれている。ルーン文字列の内容は次の通りである。

王ハーラルは、その父ゴームと母チューラを記念してこの碑をたてるよう命じた。これなるハーラルは、全デンマーク、そしてノルウェーを手中にし、デーン人をキリスト教徒となした。

この大イエリング石碑は、デンマークの歴史にとって大変重要な情報を私たちに伝えてくれる。つまりハーラル青齒王が、デンマークを統一し、ノルウェーを支配し、デンマークをキリスト教化させたという歴史的事実である。キリスト教国家デンマークの誕生を告げる大イエリング石碑は、現在まで続くデンマーク王国成立のシンボルとなった。そのため東京渋谷の猿樂町にあるデンマーク大使館の玄関口にも、そのレプリカが飾られている。

当時のデンマークには同時代のイングランドや大陸諸国のような年代記がまだなかったため、デンマークに関する歴史的事実を知ることが困難であった。そのような事情を鑑みるならば、この石碑の証言のもつ重みは決定的である。しかしながら私た

ちが参照したのは、じつはイエリング石碑に書かれたルーン文字テキストの部分だけである。テキストは印刷されてしまえばただの文字列であるが、実際には、そのテキストをとりまく多様な環境、つまり歴史コンテキストのなかで機能している。そのような厳然たる事実を踏まえるならば、歴史コンテキストを抜きにしてルーン石碑を読み解くことはできない。

それでは具体的にどのような方法で接近すべきだろうか。先ほど、ルーン石碑はどれも定型文を採用していることを確認したが、じつのところ、定型文以外の要素は千差万別である。ルーン文字テキストの内容はいうまでもなく、そのテキストの刻まれる石の形状や設置される場所などによって、全ての石碑が差異化されている。なぜこのような差異化がおこるのだろうか。じつのところルーン石碑の作成は誰にでも可能というわけではなく、かなりの資本が必要となる。したがって、ルーン石碑という「もの」は、それ自身が建立者の資本力の誇示であり、所属する共同体のなかで建立者の位置を体現する政治的表徴である。ルーン石碑が視覚に訴える「もの」であるとするれば、たとえその表面に刻銘されたルーン文字テキストが読めなくとも、ルーン石碑それ自体を目にすることで建立者のおおよその社会的地位は想像できる。隣の石碑に比べてこの石碑はどうだというように、あちこちに建立された石碑を見慣れた観者は、視覚

化された石碑間の差異を瞬時に理解することができる。

それでは、ルーン文字テキストに対してそのコンテキストがもつ意味を、二つのイエリング石碑を用いてより具体的に考えてみよう。まずテキストを支える石材についてである。写真からわかるように、小石碑は高さ一三九センチメートルの直方体、



図1 イエリング石碑

大石碑は二四三センチメートルの三角錐である。前者は最も面積ある二面にわたり、縦にルーン文字のみが刻まれているが、後者は一面に横並びのルーン文字が刻まれ、もう一面にはノルウェーの支配に関するルーン文字列とイエリング獣とよばれる獣が、最後の一面にはデンマークのキリスト教会に関する文字列と磔はりつけとされたキリストが描かれている。各面が装飾文様で縁取られたこれらの図像は、建立当時おそらく彩色されていたことだろう。

次に建立された場所について考えてみよう。最初に述べたように、イエリング石碑はイエリング・モニユメントの一部である。本来であれば、このモニユメントの配置全体のなかで二つの石碑の意味を考えるべきなのだが、ここでは石碑間の関係に限定してみよう。重要と思われるのは、二つの石碑が並置されていることである。このような配置を試みたのは、大石碑を建立したハーラル青歯王以外にはありえない。ハーラルはあえて父の石碑と自分の石碑を横に並べたのである。

それではなぜ、ハーラルは二つの石碑を並置したのだろうか。テキスト面からみた理由の一つは、イエリング王朝の開祖である父ゴームならびに「デンマークの誉れ」と称された母チューラとハーラル自身の関係を明確にするためである。父との関係はハーラルによる王位継承が正当であることを確認し、母との

関係は「デンマークの誉れ」と称された母（ならびに彼女の出自する在地有力家門）と緊密な関係を保っていることを誇示する。とりわけ母に関する情報は大石碑にないため、二つの石碑を並置したことで得られた情報の補足効果は明白である。

「もの」としての差異が生み出す効果はいっそう大きい。小石碑は、ゴーム老王というデンマーク王権の石碑ではあるものの、じつはそのテキストの長さ、石の大きさ、簡素な装飾といった点では当時の平均的なルーン石碑と変わるところはない。

その事実、ゴームは、たとえ王といっても、十世紀初頭デンマークに群雄割拠する他の在地有力者とそれほど差がなかったことを反映しているのではないだろうか。それに対してハーラル青歯王が建立させた彩色された図像の刻まれた巨大な石碑は、あらゆる点においてデンマークの他の石碑を圧倒している。それほど差異化された二つの石碑が並置されているさまを眼にした者は、何を感じ取っただろうか。先ほど指摘したように、ルーン石碑がその建立者の資力を反映する政治的表徴であるとするならば、在地有力者と変わらぬ石碑の建立者ゴームと他を圧倒する石碑の建立者ハーラルとの間に、彼らの行使しうるリソースの差を認めることにならないだろうか。ハーラル青歯王は、父の石碑と自分の石碑を並べること、俗な言い方をすれば「父を超えた」こと、そして周囲の在地有力者を凌駕する権力

を手中にしたことを、ルーン石碑の観者に誇示したと考えることはできないだろうか。

以上述べてきたことは仮説である。しかしながら印刷されたテキストだけではなく、そのテキストを支える環境に留意しながらルーン石碑そのものと対話することで、従来以上に多くの情報を引き出すことができる、と私は考えている。

#### ▼参考文献

小澤実・薩摩秀登・林邦夫『辺境のダイナミズム』（ヨーロッパの中世第三巻）岩波書店、二〇〇九。

Minoru OZAWA, "Rune stones create a political landscape: towards a methodology for the application of runology to Scandinavian political history in the late Viking Age: Part 1 & 2", *HERSETEC: Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration (SITES 2)* vol.1-1 (2007), pp. 43-62 & vol. 2-1 (2008) in press.

Birgit SAWYER, *Viking Age Rune-Stones: Custom and Commemoration in Early Medieval Scandinavia*, Oxford: Oxford University Press, 2000.

（おやわ）みのる／名古屋大学グローバルCOE研究員